

共鳴する『戦争まで』

——中村光夫のフランス体験——

中井 祐 希

一 二つの戦争まで

一九三一年、日仏の文化・学术交流を目的として、フランス政府給費留学制度が誕生する。ある程度のキャリアを積み教授のポストを得るために行く文部省留学生¹⁾とは異なり、フランス政府給費留学生は、大学生もしくは卒業したばかりの若者を対象に設けられたものであった。文化系フランス政府給費留学生の会（ABCの会）発行の「会員名簿」(ANNUAIRE de L'Association des Anciens Boursiers Culturels du Gouvernement Français, Numero.5.2016) をみていけば、戦後それぞれの分野で活躍していく研究者の名前が数多く確認できる。

そして、この給費留学生達の中に、当時気鋭の文芸評論家として活躍していた中村光夫も含まれていた²⁾。中村は一九三八年、第七回の給費留学生であり、同期には木田文夫（東大・医学）・村上仁（京大・精神）・稲村耕雄（東工大・工学）・河合享（早大・仏文）・関口俊吾（パリ高等美術学校・芸術家）がいた。中村は、留学直前に書いた文章にて、「僕の様狭い範囲で特殊なことをして居ると、無意識の裡に色々物の見方に癖がついて来勝ちである。／今度の渡仏はさういふ垢を洗ひ落して、もう一度色々な事を新しく考へ直すのに絶好の機会を与へられたわけである」(『フランス行など』『帝国大学新聞』一九三八年六月一日) とその意気込みを語っている。「二葉亭四迷論」(『文学界』一九

三六年四月一〇月) で第一回池谷新三郎賞を受賞し、新進気鋭の文芸評論家として活躍し始めていた中村にとって、このフランスへの給費留学はさらなる飛躍の契機とみなしていたのである³⁾。

しかし、中村の代の留学生たちは、激動のヨーロッパ情勢の中に巻き込まれていくことになる。中村は一九三八年一〇月、フランスへ旅立ち、当初パリを中心に滞在していたが、一九三九年六月からトゥールの語学学校 (Institut de Touraine) へ入学する。しかし、同年八月二日、独ソ不可侵条約締結の知らせを聞きヨーロッパを脱出、避難船の出港許可が下りるまで多少足止めをくらったが、アメリカ経由で二月四日、なんとか帰国の途につく。二年間の留学生生活の予定が、第二次世界大戦の勃発により僅か一年足らずの留学体験となってしまうのである。

それでも帰国後、中村は一連の留学体験、特に一九三九年六月から九月にかけてのトゥールでの生活を「トゥールの宿」という題で『文学界』にて連載していくことになる。連載は「ロアルの宮殿」・「戦争まで」と改題を重ねていき、中村の戦中期のライフワークとなっていた。しかし、一九四一年一二月、アジア・太平洋戦争勃発により連載中止を余儀なくされる。その時の状況について、中村は「厭戦国」フランスの事情など書くことは雑誌から喜ばれなくなつたので、一応打切ることになりました」(『戦争まで』『青春の記録』『出版ニュース』八

二五号、一九七〇年三月）と述懐している。その後、中村は「戦争まで」の八章から一〇章までを書き下ろし^③、一九四二年七月に単行本『佛蘭西紀行集 戦争まで』^④（実業之日本社）を刊行する。

『戦争まで』の先行研究で提出された論点を整理すると次の三点に大別できる。一つ目は、中村はフランスやヨーロッパをどのように知覚・認識し、また何を得たのかという点である。例えば、吉田健一は中村が渡仏前に得ていた豊富なフランスやルネッサンスに関する知識と、留学体験で得た実感が上手く混じり合ってトゥールの風物を知覚していく点を評価している（「中村光夫のフランス留学」『東西文学論』新潮社、一九五五年五月）。二つ目の論点は、そのような中村の留学体験がどのように帰国後の評論・批評活動に展開されていったのかについてである。先の吉田は、中村の帰国後の評論活動の対象が日本の現代文学に移った点を指摘し（「中村光夫のフランス留学」前掲）、磯田光一は、近代の超克の座談会でのレポート「近代」への疑惑（『文学界』一九四二年一〇月）や、戦後の『風俗小説論』（河出書房、一九五〇年六月）への影響関係を見出している（「解説」『戦争まで』中公文庫、一九八二年九月）。浜田泉は、日仏両文化を絶えず比較検証し続けていた中村にとって、『戦争まで』は「戦後の新たな出発を予告する生涯の分岐点」（「中村光夫の青春とフランス体験——一九三〇年代から『戦争まで』及び一九四〇年代へ——」『中村光夫とフロベール——ロマン主義のあとさき』成文堂、二〇一九年七月）だったと評価付けている。三点目は、中村の特徴的な「です・ます」調の文体が、『戦争まで』で最初に登場した理由についてである。菅野昭正は、「文学を社会の縁辺に引きだすのではなく社会のなかに置き、普通の市民」を「文学のなかに招きよせるため」使用し始めたのではないかと考察している（「中村光夫・人と作品」『昭和文学全集』九巻、小学館、一九八七年一月）。

論者も先行論で指摘されたような論点や分析については概ね首肯する立場である。ただこれらの先行研究で見過ごされてきた観点があると考えている。それが、先述した『戦争まで』の連載時期についてである。『戦争まで』は、第二次世界大戦勃発までのフランスでの留学生活が描かれている。しかし『戦争まで』の連載時期は、帰国後の一九四〇年二月から一九四一年二月までであり、連載終了の理由は、アジア・太平洋戦争勃発によりフランスについて書くことが困難になったからであった。このような執筆状況を加味すると、この『戦争まで』には二つの戦争までの状況が刻み込まれている。一つは第二次世界大戦まで（書かれた内容）、二つ目はアジア・太平洋戦争まで（書かれた時期）である。先行論では、中村の一九三八年から三九年のフランス留学体験の内実、さらにそれがどのような帰国後の文学活動に影響を与えていくのかといった点に重きが置かれており、四〇年から四一年にかけての執筆時期や同時代性という視点が看過されているのである。

例えば、大杉重男は中村光夫の『戦争まで』と一九三六年のフランス体験を描いた横光利一の『欧州紀行』（創元社、一九三七年四月）を比較した結果、中村の『戦争まで』の「形作る言葉があまりにも滑らかで破綻や齟齬の痕跡がない」^⑤点を挙げ、作品内にフィクションが混じり込んでいる可能性を指摘している（「横光利一と中村光夫 その西欧体験をめぐる」『横光利一 欧州との出会い——『欧州紀行』から『旅愁』へ』井上謙・掛野剛史・井上明芳編、おうふう、二〇〇九年七月）。しかし、両者の紀行文には、決定的な違いがある。それが前述した執筆時期という問題である。横光の『欧州紀行』は、その初出の多くがヨーロッパ滞在中に執筆・発表されたものだった。つまり、現在進行形の旅について書かれた紀行文だといえる。現在進行形で文章を断片的に

発表していくため、内容部の破綻や齟齬が発生しやすく、しかし国内の言説やコンテキストから離れた海外で書くことになるため、作家独自の視点が表出しやすいという可能性も有しているだろう。対して、中村の『戦争まで』の初出の多くは帰国後、執筆・連載されたものである。つまり完結した旅を想起しながら書いた紀行文であるといえる。自身の体験を一つの大きな旅だとみなし、それを統一・物語化でき、必要とあれば、国内にて文献などを参照することができる。内容部の破綻や齟齬は、前者のタイプよりも発生しにくいといえるだろう。このように考えていけば、自身の体験を想起・追憶し、再構成していく『戦争まで』には、帰国後の同時代状況が少なからず影響を及ぼしている可能性も否定できない。

そこで本稿では、『戦争まで』の内容部の分析は勿論のこと、執筆された同時代状況にも目配せしていくことで、中村がどのように自身の留学体験を想起し、『戦争まで』を執筆していったのか、その認識の変化を辿っていく。具体的な手順としては、『戦争まで』を、前半部である「トゥールの宿」と「ロアルの宮殿」の章、後半部である「戦争まで」の章の二つに分け、戦争が迫り来るかもしれないという動的な時代の中で、どのように『戦争まで』が生成されていったのかについて明らかにしていく。

二 薄らぎつつある現在の戦争・批評対象としての過去の戦争

中村は「戦争まで」の連載について、回想記『憂しと見し世』（筑摩書房、一九七四年一月）の「文学界」と「批評」という章にて、次のように語っている。

僕は「戦争まで」の連載を始めました。もともとこの題はあとからつけたもので、最初は「トゥールの思ひ出」として数回つけました。このおかしな題も当時の僕の気持を直接現したものでした。

ここからわかることは二点ある。一点目は、連載当初中村は紀行文を「トゥールの思ひ出」と名づけていたこと、二点目は、一九四一年の五月から、その気持ちが変化して「ロアルの宮殿」、「戦争まで」と題名を変更していったことである。章題の変更にも「当時」の状況が影響していたことがうかがい知れる。以上の点を念頭に置き、「トゥールの思ひ出」（『文学界』一九四〇年二月）の文章をみてみよう。

わづか三月でも今度の僕の短いフランス滞在ではパリについて長く暮したわけで、戦争などに遭はなくとも僕には印象の深い街です。そこで九月に這入つてから宣戦布告の不安な空気のなかで後から考へると馬鹿々々しいやうな心配を大真面目でしたことも、今から思ふと懐しい気がします。（※傍点は論者が打った。以下同様。）

たしかに同章にて、中村はヨーロッパからの脱出中、潜水艦の襲撃や機雷の話題を聞き、「出港と決つても、ほつとする気にもなりません」と振り返っている。加えて独ソ不可侵条約締結後、中村のいるトゥールに避難して来た第四回給費留学生の小林正は、慌ててトゥールから避難しようとする中村の姿を書き記している（「戦うフランスとの別れ」『自我を求めて』進路社、一九四七年七月）。不可侵条約締結から帰国に至るまで、中村は終始、来たるべき戦争に対して危機感を抱いていたことがわかる。

しかし、一九四〇年二月に発表された先の引用部で中村は、「後から考へると馬鹿々々しいやうな心配を大真面目でした」と記してい

る。この心境の変化は一体何が要因だったのだろうか。そこには、当時「奇妙な戦争」と呼ばれたフランスの戦時状況が影響を及ぼしているだろう。一九三九年九月にナチス・ドイツがポーランドに侵攻して第二次大戦が勃発したが、一九四〇年五月まで、フランス・ドイツ間では大規模な戦闘が行われず「奇妙な戦争」と称されていた。パリ陥落直前までパリに滞在していた小松清は、一九三九年一〇月に入ってから、「その昂奮は目にみえて日一日と民衆の心から薄らいでゆくのだった」（『灰色の白日夢 まへがき』『沈黙の戦士』改造社、一九四〇年二月）と書き残している。独ソ不可侵条約締結後、すぐに日本へ引揚げたが、フランスでは大規模な戦闘が行われずに肩透かしをくらったという当時の心境ゆえ、中村は「馬鹿々々しいやうな心配を大真面目」にしていたのだと考えられる。

だが、興味深いのは「馬鹿々々しいやうな心配を大真面目でした」と記した先の引用部が単行本化される際に削除されたことにある。単行本化された一九四二年時点では、パリが陥落し、ヨーロッパ戦線が拡大し、アジア・太平洋戦争が勃発している。「馬鹿々々しいやうな心配」が現実のものになったからこそ、この箇所が削除されたのである。このように、『戦争まで』の連載や単行本での削除箇所を見ていくと、中村の第二次世界大戦に対する認識が執筆時期毎に揺らいでいたことが看取できる。

こうした戦争の脅威が薄らぎつつあった状況下で、中村は「戦争などに遭はなくても僕には印象の深い街」としてトゥールの思い出を書き出していく。まさに当初の章題通り、「戦争」についてというよりも、トゥールの思い出を書くという点に重きが置かれていたのである。

では、中村はトゥールの何が思い出に残ったのだろうか。それは、

トゥールという土地にある歴史や文化、伝統だったといえる。中村は、「ロアルー帯の谷」には「フランスに始めて近代国家が誕生し生長した時代の歴史の思ひ出が、おそろくどの土地よりも鮮やかに刻まれている」（『バルザックの故郷』『文学界』一九四〇年三月）とし、「シューンソーの美しさは、そこに生きたルネッサンスの精神がいかにも自然に滲み出ている」（『シューンソーの離宮』『文学界』一九四一年三月）と評価付けていく。同時期に発表された文章「戦乱の歐洲より帰りて」（『都新聞』一九三九年二月二一―四日（のち『歐洲戦争と知識階級』と改題））においても、「フランスは特に国民としての統一も古く、長い伝統を誇つてゐる。だが僕等が本当に感心するのは彼等の伝統の古さではない、いはばその伝統の流れの切れ目なさである」という文言が確認できる。建造物や人々の現代生活の中にも、トゥールの歴史や伝統、ルネッサンスの精神が刻み込まれているという認識を中村は繰り返し書き記しているのである。

加えて、「ロアルの宮殿」の章を読み進めていけば、一人称の「僕」が減少し、同時に多数の引用文献が挙げられていることに気づかされる。中村は自分が訪れたトゥールの建築物に対して、様々な文献を引用しつつ、自身の考えを開陳していくのである。さながら「ロアルの宮殿」の章は、紀行文というよりも文明批評の文章として読むことができる。このような文章の形式の変化も、同時期中村の執筆状況が影響していると考えられる。単行本『戦争まで』の「後記」には、「本書のために貴重な蔵書や写真を快く貸して下さった渡辺一夫、河盛好蔵の両氏」という文言がある。本稿第一章にて確認したように、中村は留学直前に「もう一度色々な事を新しく考へ直すのに絶好の機会を与へられた」と自身の留学体験をみなそうとしていた。だとすれば、「馬鹿々々しいやうな心配」をしなくてもよくなった状況下にお

いて、中村は自身の体験と文献を入手しやすい環境という利点を活かして、トゥールの歴史や伝統を対象として批評活動を行っていた、そういう時期といえるだろう。

その後、伝統や歴史の連続性に着目していた中村は、フランスの近代化の問題へと論が展開していく。そこで引かれている具体的な文献として例えばジュール・ミシュレ『フランス史（中世）』（一八三三—四四）が挙げられる。中村は、『フランス史』を参照した後、「彼の云ふ『二つの世界』または『二つの時代』の「接触」に似た変化が、以後ヨーロッパ文化が世界に伝播するにつれ、地球上いたる所の国々で相次いで繰返された」（『ルネッサンス宮殿』『文学界』一九四一年二月）と記す。加えて中村は、イタリア戦争をきっかけにフランスの騎士道文化とイタリアのルネッサンス文化が文化的接触をして、それがフランスの近代化を促進させたという認識に至っていく。

ルネッサンス其物の根本的な性格が新たな文化に触れた若い野性を持つ国民の激しい覚醒を意味するものとすれば、このときすでに十六世紀のルネッサンス運動の中心は爛熟と頹廢のイタリアを去つて、フランスに移るべく約束されてゐたと云へませう。この意味で戦争は時として二つの異つた民族の間の巨大な結婚に譬へられます。（中略）お互の誤解から必要以上に傷け合ふこともありますが、その激しい血の洗礼はしばしば新しい生命、新しい文化の母胎たる使命を果すことがあります。（『イタリア戦争』『文学界』一九四〇年一〇月）

ここでは戦争を文化接触の機会とみなし、文化の創出に寄与する一面を見出している。執筆時期において広がりつつある進行形の戦争ではなく、過去のヨーロッパでの戦争を取り上げ、しかもそれを文化接触の機会と中村はみなしていく。『戦争まで』の前半部、特に「ロア

ルの宮殿」の章をみていくと、戦争の脅威が薄らぎつつあった執筆時期において、中村は批評家として自身の留学体験を振り返り、また文献を踏まえフランスの近代化の問題を検証していることが確認できる。

三 迫り来る戦争・戦争に巻き込まれていく人々

後半部の「戦争まで」の章では、前半部でのトーンとは異なり、トゥールで出会った人々との交流や戦争によって散り散りになっていく様子が細やかに描かれている。

まず中村がなぜトゥールの語学学校へ行くことになったのかを他の給費留學生の言説を参照しつつ確認しておく。中村は、トゥールに行く理由を、「パリの日本館にばかりゐては一向フランス語が喋れるやうになれないので、しばらく田舎へ行つて勉強して来ようと思ひます」（『巴里通信』『文学界』一九三九年七月）と記していた。このような中村の決断の背景には、当時の給費留學生達のパリ生活が影響していた。給費留學生達は基本的にパリの一四区、大学都市にある日本館に入ることとなっていた。そのため、パリの私生活はどうしても日本人同士の交流が多くなりがちであった。中村より先にパリに留学をしていた東京帝国大学仏蘭西文学科出身の留學生達の文献を確認してみると、小林正は大学の講義が終わっても留學生達と交流が出来ず（『ソルボンヌ大学のことども』『自我を求めて』進路社、一九四七年七月）、鈴木力衛はフランスに向かう船内で外国人達と交流しない留學生達に疑問を呈し（『日本人と会話』『ふらんす』一九四三年一月）、小場瀬卓三は、日本館にいて学校に通うだけではフランス語も上達しないし、フランスの生活も分からないと手紙にてその環境を嘆いていた（一九三六年

一月五日』『巴里だより』白水社、一九九〇年二月)。このような閉鎖的なコミュニティを脱し、語学力を向上させるため、中村はパリから離れ、一人トゥールの語学学校へ向かったのである。

「戦争まで」の章の連載第一回目にて、中村はトゥールの語学学校、アンステイテユ・トゥ・トゥーレーヌに学びに来た学生達について次のように説明している。「一番数の上で優勢なのはやはりイギリス人とアメリカ人で全体の半分近くを占めてゐるほか、オランダ、デンマーク、スイス、スエーデン、ノルウエーなどの学生も可成り大勢ゐて」、またポーランド人、フィンランド人、ルーマニア人、「それぞれ二三人づつ異彩を放つてゐて、(中略)めいめい勝手な訛りでフランス語を喋つてゐる所は、まるでヨーロッパの複雑な人種分布の標本でも見てゐるやうでなかなか愉快でした」(「戦争まで(一)」『文学界』一九四一年五月)。語学学校と中村が滞在する宿舎⁸には、老若男女、様々な国籍の人達が登場している。また外国人の多くが、固有名と国籍がわかるように記されているのも特徴的である。続けて中村は、パリとの生活を比較して、次のように述べている。「大都会の生活では知り合ひになる人間の数も多い代りに僕等はただお互に生活の断片しか見合せはないに反して、静かな田舎街では狭い範囲の人々にしか会へぬ代りに、おのおの人間がその丸彫りに近い姿を見せ合ふとも云へませうか」(「戦争まで(九)」『戦争まで』実業之日本社、一九四二年七月)。このようにトゥールでの生活は、中村に単なる外国人ではなく、具体的な顔を持ち個々の人格を持った人達との出会いをもたらししたのである。

ではなぜ中村は、これまで展開してきたトゥールの歴史や伝統への着目から、トゥールでの人々へと関心が向いていったのだろうか。「戦争まで」の章の第一回目にて、中村は次のように語っている。少

し長くなるが引用してみる。

この平凡な田舎街で呑気なひと夏を一緒に過した仲間達は、皆浅い知合ひなのに不思議に強く記憶に刻みつけられてゐます。／ひと夏と云つてもわづか一月か二月足らずのことで、七月初めから街を賑し始めた学生達は八月の末には急に迫つて来る戦争の嵐に落葉のやうに吹き散らされてしまひ、そのとき、物々しい動員風景のなかで荒しい別れを告げ合つた仲間のうち、特に身近く付き合つて今でも時々手紙でも書きたく思ふ四五人の人達さへ、皆それぞれの国が戦乱に捲き込まれて、住所も変り生死の消息も知れず、お互に遠く離れてしまへば、再会の機会はおろか、「生きてゐる印」を伝へ合ふ手だてすらないのですが、それだけに却つて戦争に途切れて終つたこの短いひと夏の生活は、そこで出合つた厭な人間や滑稽な事件などをも含めて、もはや歴史に呆気なく葬られた戦前のヨーロッパの最後の姿を象徴するやうに時々なつかしく記憶に蘇つて来ます。／今かういふ思ひ出をあまり色の褪せぬうちに辿つて、戦争といふ大事件が僕等の住む田舎街の片隅に起した小さな波紋を自分の見聞きしたままに描いて見たいと思ひます。

連載を始めた頃の「トゥールの思ひ出」・「ロアルの宮殿」の章では、「戦争などに遭はなくとも僕には印象の深い街」として、トゥールの歴史や伝統を文明批評的な形式で描いていた。しかし、先程の「戦争まで」の章では、「皆浅い知合ひなのに不思議に強く記憶に刻みつけられてゐます」、「戦争に途切れて終つたこの短いひと夏の生活は、(中略)もはや歴史に呆気なく葬られた戦前のヨーロッパの最後の姿を象徴するやうに時々なつかしく記憶に蘇つて来ます」と述べている。これまで戦争を結婚に例え、「文化の接触」の機会とみなしてい

たのとは異なり、中村はそのような大きな歴史から「葬られた」人々や彼等との生活の「記憶」を書き始めていくのである。

加えて、語る「今」の地点から戦前のトゥールの情景を「想起」している点も重要である。「戦争まで」の章の執筆前後の出来事を確認していけば、パリ陥落やトゥールの空襲、独ソ開戦など、ヨーロッパ戦線が拡大した中で連載が始まっていた。このような執筆時期を加味すると、中村はヨーロッパ戦線が拡大していくことと、トゥールが空襲にあつたというを知り、しかしフランスに戻ることもできなくなつたため、「生きてゐる印」を伝へ合ふ手だてすらない状況に陥っていく。以上のような同時代状況ゆえ、中村のフランス体験での「想起」の対象が変化し、連載時のタイトルも「戦争などに遭はなかつとも僕には印象の深い街」だつた「トゥールの思ひ出」から「戦争まで」に変更したと考えられる。

では、そのような戦争に巻き込まれていくトゥールの人々を中村はどのように追憶し描いていたのだろうか。その様子は、単行本加筆部分、つまりアジア・太平洋戦争勃発後に執筆された「戦争まで（八）」（一〇）に色濃く描かれている。例えば、ドイツ国境付近にあるフランスのメッツ出身のジネットは、戦争の脅威が日々強くなつていく中、いつもとは違う表情をし、中村はそこにナチス・ドイツに対する「肉体に浸み込んだ憎悪」を感じ取る。下宿のお内儀は、長男が戦地に赴くかもしれないためサロンで一人涙を流し、その姿を中村は目撃する。スウェーデン人の女性アンナは、普段は理知的であつたのに、「激しい想念に身を慄はすやう」な姿を見せる。トルコ人のアタチュルクは、これまでは枢軸国出身である中村に対し敵意をむき出しにしていたが、不可侵条約締結後の日本の対独関係の見直しの報道を聞き、その態度を一変させる。これまで学校や下宿先で多種多様な

人達が日常生活を過ごしていたが、独ソ不可侵条約締結前後から、そんな彼ら一人一人に「戦争の嵐」が襲い掛かつていく様子が丁寧に描かれていく。

次の引用部は、中村と語学学校で一緒だったブレットというイギリス人の軍人が急遽徴兵のため帰国する、「戦争まで」のラストシーンである。

外国で語学を習つてゐるやうな閑職にゐる士官を即刻呼び戻すやうでは、英国もかなり本気で戦争を覚悟してゐると見なければならぬわけで、避け難い危機の切迫はこの身近かな一中尉の動きに端的に感じられ、（中略）帰り途に人影のまばらになつた暗い広場を横切ると、突当りの市役所の玄関の脇に、いつの間にか貼られたのか、非常の事態に鑑みて国民の財産を政府が随時収用することがあらうといふ徴用の布告が、夜目にも白くつきりと壁に浮かんでゐました。

ブレットを見送つた後、市役所の玄関の脇に、政府が国民の財産を随時収用するという布告が張り出されていることを中村は目撃して作品は閉じられている。個人と彼らの生活が否応無く戦争に巻き込まれていくことが象徴的に描かれているのである。

繰り返すように、このような動員されていく人々の状況を中村が描いていた時期は、アジア・太平洋戦争が勃発する一九四一年二月から翌年の二月までであつた。中村は、戦争勃発後、病弱の人達も召集の対象となつた日本の状況を振り返り、「僕らはいつ赤紙で「引っぱられる」か解らなくなり、戦争が明日にも個人的な災厄としてふりかかる覚悟をすることが必要になりました」（『戦時の鎌倉』『憂しと見し世』筑摩書房、一九七四年一月）と後年回想している。もちろん、中村の回想記をそのまま当てはめることには注意が必要である。しか

し、これまでに以上に日常化されつつあった執筆時の日本での動員風景と、「戦争まで」の最終場面は、どこか重なってみえてくる。換言すれば、アジア・太平洋戦争勃発後、『戦争まで』を単行本としてまとめていくにつれ、タイトルの中にある「戦争」という意味が、ヨーロッパでの第二次大戦を指していただけではなく、アジア・太平洋戦争をも含み混んでいったと考えることはできないだろうか。その意味で『戦争まで』には、二つの戦争までが刻印されているのである。

四 中村光夫の批評活動の展開 —戦争までから戦争勃発後へ—

本稿では、『戦争まで』を動的な時間軸に置き、作品内のスタイルの変遷と執筆時期との相関性について考察を行ってきた。その結果、『戦争まで』の前半部ではトゥールの建築物やその歴史性を取り上げ、帰国後に読んだ文献を引用し考察を深めていった批評家としての中村の姿が、後半部ではヨーロッパ戦線が拡大していったため行方がわからなくなった人々や空襲を受けたトゥールを追憶し描いていくという、戦争に巻き込まれつつあった日常を体感した中村の姿が確認できる。そして、この内容部と中村の想起対象の変容には、執筆時期とそこでの環境が多分に影響を及ぼしていることを確認してきた。『戦争まで』は、二つの戦争までの状況が重なり合い、また共鳴し合いながら構成されている特異な作品として評価づけることができる。

さて最後に、本稿での考察を踏まえ、「戦争まで」の連載後、戦時下における中村の批評活動への展開と影響について概観しておきたい。

まず、戦時下における中村の大きな仕事の一つとして、単行本『戦

争まで』が刊行された同月に行われた座談会「近代の超克」に出席した点が挙げられる。その座談会後に中村が提出したレポート「近代への疑惑」には、「戦争まで」で培ってきた西洋文明や近代という問題系が受け継がれている。例えば、次のような個所にその影響が確認できる。

○ヨーロッパにおいて所謂近代精神の萌芽が最初に明瞭に形造られたのをルネッサンス時代とすれば、それは十九世紀の爛熟にいたるまで少くも五世紀を経てゐる。(中略)すべて彼等にとつては巨大な社会的規模で行はれたひとつの人間精神の実験であり、(中略)彼等にとつては本當の意味で自業自得のものである。

○文学の上でも当時の作家が外国文学の作品からは強い影響を受けながら、それを書いた西欧の作家の生きた姿を本當に究めた人がほとんどゐないやうに、思想の上でも当時の学者が西洋から受入れた新思想とは単に西欧の哲学者の学説や体系についての知識にすぎなかつたのではなからうか。

伝統・歴史・精神性の「切れ目なさ」、文化の「接触」による新しい思想の受け入れの問題は、「近代」への疑惑」でも継続していることがわかる。

だとすれば、中村が「戦争まで」の連載中止後、すぐ同誌の『文学界』に「二葉亭四迷伝」(一九四二年一月〜一九四三年三月、その後『批評』・『展望』に掲載)を連載し始めた理由も首肯できる。中村は連載第一回目(二葉亭四迷伝(一))『文学界』一九四二年一月)にて、「失敗」の連続だった二葉亭の特異性や「人」としての魅力を説明しているのだが、注目すべきは二葉亭と明治時代との関わりについてである。

彼の不幸は或る意味で明治時代を通じて我国に移植された近代

文学の特異な性格を離れて考へることは出来ない。更に広く言へば彼の生きた明治といふ時代を通じて我国の文化の蒙つた奇妙な歪みを無視して語ることはできぬものである。

浜田泉は、ミシュレの文化接触による文明の発展に対する中村の次の省察、「我国の明治以来の激しい風俗の革命も、普通比較される、フランス革命などより、むしろこの四百年前のルネッサンスの運動に多くの類似点を持つのではないか」（『ルネッサンス宮殿』『文学界』一九四一年二月）に彼の独自性を見出している（『中村光夫の青春とフランス体験』前掲）。このような中村の認識は、「近代」への疑惑⁽¹⁾での「近代精神の萌芽が最初に明瞭に形造られたのをルネッサンス時代とすれば」という文言からも確認できるのだが、先の浜田の指摘を踏まえれば、明治維新という歴史の中で翻弄され「敗北」していった二葉亭四迷を取り上げることは、近代の超克でも議論にあつた日本の近代化について考えることにも繋がるだろう。河底尚吾は『中村光夫論』において、二葉亭のように「人生を正直に生きぬくには、さまざまな社会の圧力や抵抗に身をさらさなければならぬ」とし、「二葉亭四迷伝」の特徴は「資料を客観的に並べていくというような、いわゆる「伝記」体」ではなく、「あたかもそれが自分のたどる、あるいはたどつた生活の軌跡を吟味するかのように、二葉亭と中村とが一体となつている」点を挙げている（『二葉亭四迷へのアプローチ』『中村光夫論』武蔵野書房、一九九八年三月）。作品論だつた「二葉亭四迷論」から、明治という時代に生きた二葉亭その「人」に焦点を当てる「二葉亭四迷伝」への発展には、「近代の超克」と「近代」への疑惑⁽²⁾での中村の問題意識はもちろんのことだが、文明批評的なスタイルから時代に翻弄されていく人々へ関心が向けられていった『戦争まで』も少なからず影響を及ぼしているのではないだろうか。

注

- (1) 海外留学とアカデミック・キャリアの形成については、天野郁夫『教育と近代化——日本の経験』（玉川大学出版部、一九九七年九月）が詳しいので参照されたい。
- (2) 中村は当時東大助手だつた平岡昇から推薦の話があつたことを回想記『今はむかし ある文学的回想』（講談社、一九七〇年一〇月）の「十七」章にて書き残している。第三回給費留学生だつた丸山熊雄も中村同様、助手や教授から推薦の話があり受験したことを証言している（『一九三〇年代のパリと私』鎌倉書房、一九八六年二月）。このような背景もあつてか、第三回以降毎年のように東京帝国大学文学部仏蘭西文学科の出身者が給費留学制度によりフランスへ留学していた（第三回・丸山熊雄・前田陽一、第四回・有永弘人、第五回・小場瀬卓三・小林正、第六回・鈴木力衛）。
- (3) 初出「戦争まで（七）」（『文学界』一九四一年二月）の附記に「あと百枚ほど書き足して上梓の予定」とあり、池田書店版『戦争まで』（一九五一年四月）の「戦争まで（一〇）」末尾に「一九四二年二月」との記載がある。以上のことから、単行本加筆部分の執筆時期は、一九四一年二月から翌年二月頃までだと推測できる。
- (4) 『戦争まで』の書誌情報は本稿末尾の表を参照のこと。
- (5) 第五回給費留学生だつた小林正も『戦争まで』について、「きわめて知性的に書かれている」（『留学生時代の思い出』『中村光夫全集 月報』第三卷、筑摩書房、一九七二年七月）と評価付けている。
- (6) また中村は、「戦争まで」の連載が始まつた直後、一九四〇年四月から外務省情報部の嘱託として仕事をしていた。仕事に就ききっかけは、友人の和井田一雄から、外務省の仕事を手伝え、再度フランスに行けるかもしれないと勧められたからであつた。情報部の仕事としては、フランスの新聞を読み、外国事情の調査・報告などだつた（『外務省情報部』『憂しと見し世』筑摩書房、一九七四年一月）。さらに、同時期に婦人向け雑誌『新女苑』に「名作絵物語」としてフランスの最新の小説を翻訳・紹介していた。このように、「ロアルの宮殿」の執筆時の中村の環境は、フランスの文献や新聞を入手しやすい環境にいたことがわかる。
- (7) 丸山熊雄によると、「パリで学生会館（論者注・薩摩治郎八が出資して一九二九年に完成した宿舎）に入れられて。当時の日本館は薩摩会館でいってね。設備も悪いし泊る希望者も少なかつたんで、ブルシエを無理失理入れて、部屋代をブルスから差っ引くんです。ひどいんですよ。だから入れられちゃつたんです」（『パリへの道』『一九三〇年代のパリと私』鎌倉書房、

(8) 一九八六年(二月)と述べている。

中村は、下宿の主人に「会話といふものは学校で教はるだけでは決してうまくなるものでない。それで少しでも余計話をする機会をつくるためにうちの(中略)子供達と一緒に食事するやうに」(「下宿と学校」『文学界』一九四〇年四月)と勧められ、子供達と交流をし始める。トゥールに避難して来た小林正は、下宿での中村の様子について「下宿のひとたちから深い信頼をよせられている姿を今でも思い出すが、それが私にはうらやましくてならなかった」(「留学時代の思い出」『中村光夫全集 月報』第三卷、一九七二年七月)と回想している。

(9) 同時期に中村は、外務省情報部の仕事を辞め、筑摩書房の顧問の仕事に就いている。情報部の辞任の理由については、中村は後年、パリ陥落以降フランス行きが叶わなくなった点を挙げ、「現実不可能になったフランスの夢

が次第に醒めて、日本の現実と生活が、心身を捉えはじめたのでしよう」(「筑摩書房」『憂しと見し世』筑摩書房、一九七四年一月)と回顧している。

【付記】引用部の「/」は改行を示す。本稿は、二〇一八年一〇月二八日に開催された日本近代文学会二〇一八年度秋季大会(於岩手県立大学滝沢キャンパス)における口頭発表の内容に加筆修正を加え成稿したものである。当日、貴重な資料を提供して頂いた方々、並びにフランス政府給費留学生に関する貴重な資料を提供して頂いた文化系フランス政府給費留学生の会の西海真樹氏に記して感謝を申し上げます。

(本学衣笠総合研究機構 専門研究員)

『戦争まで』書誌情報

	章	節タイトル	初出 (['文学界'])	作品内時間	作品内空間	
単行本『佛蘭西紀行集 戦争まで』 実業之日本社、一九四二年七月	パリ通信		1939年6・7月	1939年春	イタリア パリ	
	トウルの宿	避難船(初出:トウルの思ひ出)	1940年2月	1939年9~10月	ボルドー リヴァプール ニューヨーク	
		バルザックの故郷	1940年3月	1939年6月初旬	トゥール	
		初夏の街*(初出:下宿と学校)	1940年4月			
		初夏の街	1940年5月	1939年6月中旬~下旬		
	ロアルの宮殿	ロッシュの城	1940年8月	1939年7月	トゥール (ロワール地方)	
		イタリー戦争	1940年10月			
		ルネッサンス宮殿	1941年2月			
		シュノンソーの離宮	1941年3月			
	戦争まで	戦争まで	戦争まで(一)	1941年5月	1939年7月初旬	トゥール
			戦争まで(二)	1941年6月		
			戦争まで(三)	1941年7月	1939年7月中旬	
			戦争まで(四)	1941年8月		
			戦争まで(五)	1941年10月	1939年7月下旬	
			戦争まで(六)	1941年11月	1939年8月上旬	
			戦争まで(七)	1941年12月		
			戦争まで(八)	単行本加筆部分	1939年8月中旬	
			戦争まで(九)	単行本加筆部分	1939年8月20日前後	
			戦争まで(一〇)	単行本加筆部分	1939年8月22日(独ソ不可侵条約締結日)	
	○集英社版(一九七一年一月刊行の際に七収録)	クータンスの街		『美術』 1946年5・7月	1939年5月中旬	クータンス
トルーヴィルの夜			『天平』 1948年5月	トルーヴィル		

*池田書店版(1951年4月)刊行以降「未知の土地」と改題。

